

バルタル＜交流＞

中部の夏季審査会が明けて2日後の8月5日、ロシアより来日しているアレグ・ステファネンコ先生が、美和道場に来られ、海野師範はじめ集まった道場生らとともに汗を流しました。40人組手を終えたばかり、疲れも痛みも取りきれぬまま。それでも40人組手をセコンドとしてともに臨んだこともあり、自身も号令を掛けながらの全力稽古。冬は製氷室、夏はまさにサウナ室さながらの美和道場。ぬぐう間もなく噴き出してくる汗。初めて外国からの黒帯を迎えて視線の集中する中、アレグ先生も辛さを見せるどころか充足した表情に見える。

今回アレグ先生が連続組手をされる時にセコンドに付くに至ったのは、海野師範の一言からでした。

「たった独りで外国からきて（連続組手に）挑戦するなら、うちでセコンドをしてやろうじゃないか。私の時のように中学生が中心にやるといい。きっとやれる。それに、とてもいい経験になる。」と。

こうして共に戦う気持ちで臨んだ審査会を経て、この稽古は我々にとってもただの客ではない『縁』を感じました。

汗だくになった後の記念撮影はにこやかでとても清々しく、寺本二段のスマホ翻訳アプリを使った音声変換は誤変換、珍変換を繰り返し、場内は途切れなく笑いで包まれました。

女子部一同とはにかみながら。師範と真剣な面持ちで。少年部とは一人一人と順番に長い列。アレグ先生に稽古の感想を聞くと、翻訳機能にいささか難ありとはいえ、『真髄』、『永い間の夢』、『この稽古をリザーブ（予約）したい』という言葉があり、おのずと気持ちの通う印象を得ました。

終了後はアレグ先生と黒帯の面々で食事をするため、着替えを済ませ道場より出ると、少年部の子供たちと父兄は外で待っており、「アレグ先生。スバシーバ！（ありがとうございました）ダスビダーニャ！（さようなら）」と。私も何とも言えないうれしい気持ちになりました。師範の言う『相手の身になって考える』ことが小さな子供にも、そのご父兄にも共通して届き、準備して来られたと思います。セコンドの大役をいただいた中学生やそのご父兄もあらゆる場面を想定し、相談し合い、準備をしてくださったかと思えます。この場を借りて感謝申し上げます。

レストランではアレグ先生意外にも小食。但し母国ではやはりかなり食べるのだそうです。話題は多岐にわたり、モスクワ及び近郊の3つの道場の事。道場生の事。家族の写真。ご自身のサイトの事。

私事、最高師範にお供させていただき、数度の訪日経験から、喜んでもらえそうなものをとささやかなお土産を用意しました。とはいえ実は100均店で購入した扇子。ちょうど良いことに真田家の家紋の六文銭の入ったものでした。それを昔の強いサムライのマークであること。真田家が村正の刀を愛用していたこと。周知のとおり大石最高師範のニック

ネームは“妖刀村正”。それらの所縁を説明するとことのほか喜ばれました。さらにアレグ先生の帯の文字が（短いため？）途中であったため、フルネームを片仮名にし一筆箋に筆書きしました。海野師範が漢字を宛てられ、亜^{アレグ}礼愚と。亜はおなじみアジア、ユーラシアを示し、礼は礼節から。さて、愚の文字は愚連隊や愚痴など、あまり良いイメージはないようですが、実は相手に対し自身を謙遜し表現する意味に使われ、己を常に二番目に置く武道の奉仕の精神に通じています。

私は姓のステファネンコは難しく、考えもつかなかったのですが、師範はなんとステを徒手格闘の空手に因み『素手』。ファは本人の大好きな富士山から『富』。(アレグ先生『富士山』と漢字で書けるのです。)ネンは精神の『念』。コは女子部の宮崎さん、麻里さんらの「虎が良い!」の意見を入れ『虎』に。

こうして楽しい時間は瞬く間に過ぎ、23時半お開きとなりました。縁とは妙なものです。たとえ1度であってもこの出会いで多くを感じ、学べると思いました。また、こうした出会いも大山総裁が一代で築き世界に広めた極真カラテ。『オス!』は世界の共通語であることは子供たちまで納得したことでしょう。そして我々が今、大石最高師範、海野師範と続く師弟につらなり、責任ある本家日本の道場におり、片や遙かロシアには最高師範の友ヤクーニン師範やアレグ先生がいる。この縁とは？

感謝の気持ちをまた最前線の道場で返してゆきたいと思っています。ありがとうございます。押忍。

竜南道場

狩野 央康